

症例登録用紙2

《施設名》	《記入者》
《性別》 <input type="checkbox"/> 男 <input type="checkbox"/> 女	《発症時 年齢》 歳
《身長》 cm	《体重》 kg
《発症》 <input type="checkbox"/> 院外 <input type="checkbox"/> 院内 <input type="checkbox"/> 不明	《転帰》 <input type="checkbox"/> 生存 <input type="checkbox"/> 死亡
<p>《危険因子》該当する項目全てに✓を付けて下さい</p> <p><input type="checkbox"/>4日以上長期臥床 <input type="checkbox"/>3ヶ月以内の手術 <input type="checkbox"/>活動性の悪性腫瘍 <input type="checkbox"/>3ヶ月以内の外傷・骨折、</p> <p><input type="checkbox"/>中心静脈カテーテル <input type="checkbox"/>カテーテル検査・治療 <input type="checkbox"/>妊娠・出産 <input type="checkbox"/>炎症性腸疾患</p> <p><input type="checkbox"/>ネフローゼ <input type="checkbox"/>経口避妊薬 <input type="checkbox"/>先天性凝固異常 <input type="checkbox"/>抗リン脂質抗体症候群</p> <p><input type="checkbox"/>慢性心疾患 <input type="checkbox"/>慢性呼吸器疾患 <input type="checkbox"/>脳血管障害 <input type="checkbox"/>ギブス固定</p> <p><input type="checkbox"/>3時間以上坐位の長期旅行</p> <p><input type="checkbox"/>その他()</p>	
《D-ダイマー》 <input type="checkbox"/> 高値 <input type="checkbox"/> 正常値 <input type="checkbox"/> 未検	
<p>《①肺塞栓症(PE)のみ記載してください》</p> <p>■PEの病型 <input type="checkbox"/>急性 <input type="checkbox"/>慢性 <input type="checkbox"/>慢性肺高血圧型 <input type="checkbox"/>不明 <input type="checkbox"/>その他</p> <p>■診断時PEの重症度 <input type="checkbox"/>心肺停止 <input type="checkbox"/>ショック <input type="checkbox"/>ショックはないが右心負荷あり</p> <p><input type="checkbox"/>ショックも右心負荷もなし <input type="checkbox"/>不明</p>	
<p>《②PE、深部静脈血栓症(DVT)ともに記載してください》</p> <p>■DVTの症状 <input type="checkbox"/>下肢疼痛 <input type="checkbox"/>腫脹 <input type="checkbox"/>色調変化 <input type="checkbox"/>なし</p> <p>■DVTの検索 <input type="checkbox"/>施行 <input type="checkbox"/>未施行</p>	
<p>《③DVT単独、およびDVT合併のPEで記載してください》</p> <p>■DVTの診断法 <input type="checkbox"/>下肢静脈エコー <input type="checkbox"/>静脈造影 <input type="checkbox"/>CT <input type="checkbox"/>MR <input type="checkbox"/>その他()</p> <p>■DVTの部位 <input type="checkbox"/>右腸骨静脈 <input type="checkbox"/>右大腿部(膝窩静脈含む) <input type="checkbox"/>右下腿部 <input type="checkbox"/>右腎静脈 <input type="checkbox"/>右卵巣静脈</p> <p><input type="checkbox"/>左腸骨静脈 <input type="checkbox"/>左大腿部(膝窩静脈含む) <input type="checkbox"/>左下腿部 <input type="checkbox"/>左腎静脈 <input type="checkbox"/>左卵巣静脈</p> <p><input type="checkbox"/>下大静脈 <input type="checkbox"/>その他()</p>	
<p>《④PE、DVTともに記載してください》</p> <p>■治療 <input type="checkbox"/>未分画ヘパリン <input type="checkbox"/>低分子量ヘパリン <input type="checkbox"/>ワルファリン</p> <p><input type="checkbox"/>凝固因子Xa阻害薬 <input type="checkbox"/>抗血小板薬(薬剤名:) <input type="checkbox"/>ウロキナーゼ</p> <p><input type="checkbox"/>組織プラスミノゲンアクチベータ</p> <p><input type="checkbox"/>DVTに対する外科的血栓摘除術 <input type="checkbox"/>DVTに対するカテーテル血栓溶解療法</p> <p><input type="checkbox"/>PEに対する経カテーテル的血栓吸引 <input type="checkbox"/>PEに対する経カテーテル的血栓破砕</p> <p><input type="checkbox"/>PEに対する外科的血栓摘除術</p> <p><input type="checkbox"/>恒久型フィルター <input type="checkbox"/>一時型フィルター <input type="checkbox"/>回収型フィルター</p> <p><input type="checkbox"/>その他()</p>	
《コメントがあればご記入下さい》	

肺血栓塞栓症および深部静脈血栓症の実態調査について

調査期間：2011年11月1日～2011年12月31日

調査対象症例：上記期間中に確定診断された肺血栓塞栓症および深部静脈血栓症症例

調査目的：①2011年の肺血栓塞栓症症例数および深部静脈血栓症症例数の推定

②肺血栓塞栓症および深部静脈血栓症の危険因子

アンケート用紙記入時の方法と注意

① 年齢と性別

重複症例を区別するため記入を必ずお願いいたします。

② 身長・体重

Body mass index (BMI) を上記にて計算するので必ず記載をお願いいたします。入院時の値が理想的ですが、状況により入院前、または後の値でもかまいません。

③ 肺血栓塞栓症の病型について

慢性肺高血圧型は厚生労働省特定疾患の基準を満たす症例を指します。

④ D-ダイマー値について

貴施設の正常値に基づいて、高値、正常値は判断してください。

肺血栓塞栓症症例数の推定精度を上げるため、期間中に症例がない場合にも「肺血栓塞栓症アンケート用紙1」を返却くださいますようお願いいたします。まことに勝手ながら、2012年3月31日までに「症例登録用紙1」と「症例登録用紙2」を同封の封筒にてご回答を宜しくお願いいたします。なお、「症例登録用紙2」が不足の際には申し訳ありませんがコピーして記入をお願い申し上げます。

浜松医療センター院長

小林 隆夫（標記研究班 班員）

三重大学臨床心血管病解析学講座教授

中村 真潮（標記研究班 研究協力者）

三重大学大学院循環器・腎臓内科学講師

山田 典一（標記研究班 研究協力者）

事務局

〒514-8507 三重県津市江戸橋2丁目174

三重大学大学院循環器・腎臓内科学

研究責任者 太田 覚史

(TEL: 059-231-5015)

入院患者における静脈血栓塞栓症 (VTE) 発症予知に関する研究

—内因性トロンビン産生能 (ETP)を用いた活性化プロテインC感受性比 (APC-sr) および PS 抗原と PS 活性の比活性測定により VTE 予知は可能か—

研究分担者 小林 隆夫 浜松医療センター 院長
研究協力者 平井 久也 浜松医療センター産婦人科

研究要旨

【目的】術前入院患者における内因性トロンビン産生能 (ETP) に基づく活性化プロテインC感受性比 (APC-sr)、プロテインS (PS) 抗原・PS活性を測定し、これらがVTE予知に可能であるかどうか検討する。【方法】ETPとは血漿中のトロンビン産生を経時的に測定する方法で、本測定系にAPCを添加・反応させた際のETPの抑制率をcontrolとの比で表したものをAPC-srとして算出する。浜松医療センター倫理委員会で承認された本研究に同意が得られた入院患者についてETP、APC-sr、PS抗原 (totalとfree) およびPS活性 (シノテスト法) を測定して個々の相関を検討した。さらに研究に同意が得られたVTE患者も同様に測定し、陽性対象として解析した。【結果】手術患者56例、VTE患者22例 (肺塞栓症: PE16例、深部静脈血栓症: DVT単独6例) で検討した。1) PS抗原とPS活性の比活性が0.7 (-3SD)未滿を呈した症例はVTE19例中7例、PE16例中6例であり、そのうちPS活性60%未滿はVTE19例中5例、PE16例中4例であった。PSのII型欠乏症が疑われた。2) APC-srとfree PS抗原 ($P<0.01$)・PS活性 ($P<0.05$)の間には負の相関がみられ、APC-srの増加とPSの減少との関連性が示唆された。3) 予防的抗凝固薬投与中はETPとAPC-srともに抑制されるが、抗凝固療法施行前に採血できたVTE患者14例のAPC-srは 2.92 ± 1.47 で、悪性腫瘍患者術前の 1.27 ± 0.68 と整形外科患者術前の 1.27 ± 0.69 より有意に高かった ($P<0.01$)。また、術後DVT症例の術前の値は2.76と高値で、かつPS比活性は0.61と低値であった。【考察および結論】VTE高リスク患者のAPC-srおよびPS抗原とPS活性の比活性測定がVTE予知に寄与する可能性が判明した。この方法は未だどこの施設でも臨床応用されていないが、将来的に日常臨床で応用されれば入院患者におけるVTEの予知が可能であり、PS異常症患者のスクリーニングをはじめ内科入院患者や術後患者のVTE予防として最適な抗凝固薬使用が推奨可能で、予防可能な院内死亡減少に大いに寄与できるであろう。このことは国民の健康維持ひいては厚労行政にとって大きな朗報となると思われる。

A. 研究目的

わが国の深部静脈血栓症 (DVT)、肺塞栓症 (PE) は増加傾向にある。入院患者、とくに術前患者においてはそのリスクを評価し、リスクに応じた適切な予防法を講じることが重要である。しかし、現時点では発症を予知できるような血液凝固学的指標はない。そこで浜松医療センターでは入院患者、とくに術前患者において内因性トロンビン産生能 (Endogenous Thrombin Potential: ETP) に基づく、活性化プロテインC感受性比 (Activated Protein C sensitivity ratio: APC-sr) を測定し、後天性 APC 抵抗性の状態を把握することによって静脈血栓塞栓症 (VTE) 予知スクリーニング法を確立する研究を行っている。この研究の中でプロテインS (PS) も測定しているので、APC-sr と PS との関連性、および PS 抗原と PS 活性の比活性から VTE の予知が可能であるかどうか検討する。もし、これらの方法で VTE 予知が可能となれば、PS 異常症患者のスクリーニングをはじめ予防可能な院内死亡減少に大いに寄与でき、厚労行政にとって大きな朗報となると思われる。

B. 研究方法

ETP とは、合成基質 (S-2238) を用いて血漿中のトロンビン産生を経時的に測定する方法として Hemker らが報告した手法で (Thromb Haemost 56(1): 9-17, 1986)、現在では合成基質に変わり蛍光基質 (ZGGR-AMC) を用いた測定法となっている。すなわち、クエン酸加血漿にリン脂質、ヒトリコンビナント組織因子を添

加し 37°C加温の後、蛍光基質及び CaCl_2 を添加し外因系凝固反応を惹起する。生成されたトロンビンは蛍光基質の発色基を切断し、その後アンチトロンビンにより中和され、反応が終結する。一部トロンビンは α_2 マクログロブリンとも結合し、蛍光基質との反応を続けるため、コンピュータ解析によりその影響を除外する。このような蛍光基質の水解反応を一次微分した曲線がトロンビン産生曲線であり、その Area under the curve: AUC を ETP として算出する。本測定系に APC を添加・反応させることで ETP を抑制することができる。患者血漿と正常男性コントロール血漿に 8.7nM の APC を添加した際の ETP の抑制率を比で表したものを APC-sr として算出する。リスク評価されたそれぞれの浜松医療センター入院患者 (産婦人科、整形外科、外科等) で、本研究に同意が得られた患者血漿の ETP および APC-sr を測定するが、同時にまた、従来の VTE マーカーである D-dimer (DD)、フィブリンモノマー複合体 (SF)、PS 抗原 (total と free) および PS 活性 (シノテスト法) も測定して個々の相関を検討し、リスク評価に反映する。入院患者や手術予定患者は、術前 (入院時)、術後 1 日、術後 3 日または 4 日、術後 7 日、術後 14 日もしくは退院前の 4~5 回の採血となる。なお、研究対象患者は、入院時 (手術前) および退院前に超音波検査で DVT の有無を検索し、臨床経過の参考にする。さらに研究に同意が得られた VTE 患者も同様に測定し、陽性対象として解析した。

(倫理面への配慮)

本研究は、厚生労働省の臨床研究の倫理指針および疫学研究の倫理指針に則り、浜松医療センターの倫理委員会の承認を得た後に実施された。研究対象者にはインフォームドコンセントを取得しており、倫理的に問題ないと思われる。

C. 研究結果

現在解析が終了しているは帝王切開 (6例)、外科・婦人科悪性腫瘍 (30例)、整形外科下肢手術 (20例) の計 56 例、および VTE22 例 (PE16 例、DVT 単独 6 例) である。また悪性腫瘍術後症例で 1 例に DVT が発症した。現在判明している結果は下記の通りである。

1) 妊産婦では帝王切開術前術後とも ETP と APC-sr は高い。すなわち、ETP は術前が $1,937 \pm 258$ と高く、術後やや減少した。APC-sr は術前が 1.82 ± 0.45 と高く、術後も高値を持続した。悪性腫瘍患者では術前の ETP は $1,397 \pm 40$ 、APC-sr は 1.27 ± 0.68 とやや高く、術後 3-4 日目にかけて増加した。整形外科患者も術前の ETP は $1,403 \pm 40$ 、APC-sr は 1.27 ± 0.69 とやや高く、術後に増加し、4 日目に最大となった。

2) 帝王切開例では、DD は術前が $2.2 \pm 1.0 \mu\text{g/ml}$ と高値であり、術後も増加したが、4 日目がピークであった。SF も術前が $21.9 \pm 15.7 \mu\text{g/ml}$ と高値で、術後も増加したが、1 日目がピークであった。悪性腫瘍患者では、DD は術前が $1.6 \pm 1.9 \mu\text{g/ml}$ と高値で、術後も増加したが、6 日目と 14 日目がピークであった。SF は術前が $11.7 \pm 20.4 \mu\text{g/ml}$ と高値で、

術後 4 日目がピークであった。整形外科患者では、DD は術前が $2.7 \pm 5.1 \mu\text{g/ml}$ と高値で、術後も増加したが、1 日目と 14 日目がピークとなった。SF は術前が $9.6 \pm 15.6 \mu\text{g/ml}$ と高値で、術後 4 日目がピークであった。3) PS 抗原 (total と free) および PS 活性は、悪性腫瘍患者と整形外科患者では術後 1 日目に減少するものの術前および術後 4 日目以降は正常であった。妊産婦では帝王切開術前はいずれも 50%前後と低値を示し、術後 4 日目にかけて回復する傾向にあった。

4) PS 抗原と PS 活性の比活性が $0.7 (-3SD)$ 未満を呈した症例は VTE19 例中 7 例、PE16 例中 6 例であり、そのうち PS 活性 60%未満は VTE19 例中 5 例、PE16 例中 4 例であった。PS の II 型欠乏症が疑われた。

5) APC-sr と free PS 抗原・PS 活性の間には負の相関がみられ ($P < 0.01$)、APC-sr の増加と PS の減少との関連性が示唆された。

6) 予防的抗凝固薬投与中は ETP と APC-sr ともに抑制されるが、抗凝固療法施行前に採血できた VTE 患者 14 例の APC-sr は 2.92 ± 1.47 で、悪性腫瘍患者術前の 1.27 ± 0.68 と整形外科患者術前の 1.27 ± 0.69 より有意に高かった ($P < 0.01$)。また、術後 DVT 症例では 2.76 と高値で、かつ PS 比活性は 0.61 と低値であった。

7) ROC 解析により求めた VTE 陽性の cut-off 値は、APC-sr が 2.0 (感度 71%、特異度 88%、AUC 0.872)、DD が $3.5 \mu\text{g/ml}$ (感度 90%、特異度 86%、AUC 0.953)、SF が $10.0 \mu\text{g/ml}$ (感度 86%、特異度 70%、AUC 0.830)、PS 比活性が 0.72 (感度 37%、特異度 94%、AUC 0.615) であった。

D. 考察

現在判明していることとして、1) 妊産婦では帝王切開術前術後とも ETP と APC-sr は高い。悪性腫瘍患者と整形外科患者では術前の ETP と APC-sr はやや高く、術後 4 日目前後にかけて増加した。2) PS 抗原 (total と free) および PS 活性は、悪性腫瘍患者と整形外科患者では術後 1 日目に減少するものの術前および術後 4 日目以降は正常であった。妊産婦では帝王切開術前はいずれも 50%前後と低値を示し、術後 4 日目にかけて回復する傾向にあった。3) 19 例中 5 例の VTE 症例 (そのうち PE 症例は 4 例) において PS 抗原と PS 活性の比活性が 0.7 未満と低下し、かつ、PS 活性が 60%未満であったことより、これらの症例は PS の II 型欠乏症が疑われた。日本人に多いとされる PS 異常症が PS 比活性の測定により推測できることを示唆する結果である。4) APC-sr と PS 抗原 (活性) の間に負の相関がみられたことは、APC-sr の増加と PS の減少との関連性が示唆された。5) 抗凝固療法施行前に採血できた VTE 患者 14 例 (そのうち PE 症例は 10 例) の APC-sr が 2.92 ± 1.47 と悪性腫瘍と整形外科患者術前の値より有意に高かったことに加え、術後 DVT 症例では 2.76 と高値で、かつ PS 比活性は 0.61 と低値であったことより、APC-sr および PS 比活性測定が VTE 予知に寄与する可能性が示唆された。以上の結果より、APC-sr および PS 比活性測定が VTE 予知に寄与する可能性が判明したため、十分な研究成果と考えられる。しかし、帝王切開症例が少ないこと、および PE 症例と術後発症の VTE 症例がま

だ不十分であるため、さらなる症例の追加が必要である。現在症例を集積中であるが、最終的には十分評価に値する症例を集積し、解析する予定である。

E. 結論

APC-sr および PS 比活性測定は、国内外のどこの施設でも臨床応用されていない。この方法が日常臨床で応用されれば入院患者における VTE の予知が可能であり、PS 異常症患者のスクリーニングをはじめ内科入院患者や術後患者の VTE 予防として最適な抗凝固薬使用が推奨でき、予防可能な院内死亡減少に大いに寄与できるであろう。このことは国民の健康維持ひいては厚労行政にとって大きな朗報となると思われる。

F. 健康危険情報

なし

G. 研究発表

1. 論文発表

- ・小林隆夫：ヘパリン在宅自己注射療法の適応と指針. *Thrombosis Medicine* 3(4): 71-75, 2013
- ・小林隆夫：II. 各論 1. 産婦人科 A 産科. 瀬尾憲正, 古家仁編集, 周術期深部静脈血栓/肺血栓塞栓症. 克誠堂出版, 東京, 101-119, 2013
- ・小林隆夫：ヘパリン在宅自己注射療法の適応と導入方法. *脈管学* 53(No. November): 167-170, 2013
- ・小林隆夫：研修コーナー. 妊産婦救急疾患の管理 1) 重症妊娠悪阻に対する肺塞栓症とウェルニッケ脳症の予防. 日

- 本産科婦人科学会誌 65(10) 別冊：N244-N249, 2013
- ・小林隆夫：妊婦の静脈血栓塞栓症. Medical Practice 30(9): 1621-1622, 2013
 - ・小林隆夫：静脈血栓塞栓症発症の予知と早期診断. 心臓 45(7): 924-927, 2013
 - ・小林隆夫：深部静脈血栓症/肺塞栓症. 産婦人科当直医マニュアル. 臨床婦人科産科 67(4): 73-77, 2013
 - ・小林隆夫：ヘパリン在宅自己注射療法の適応と指針. International Review of Thrombosis 8(1): 78-81, 2013
 - ・小林隆夫：肺塞栓症. 周産期医学 43(1): 57-60, 2013
 - ・小林隆夫：妊娠悪阻からの肺塞栓症. 周産期医学 43(1): 61-63, 2013
 - ・小林隆夫：妊娠時の血栓症の予防・治療. 産科と婦人科 80(1): 77-83, 2013
 - ・小林隆夫：研修コーナー. 妊産婦死亡報告からみた母体安全への提言 4) 肺血栓塞栓症. 日本産科婦人科学会誌 64(9) 別冊：N418-N424, 2012
 - ・保田知生, 小林隆夫：医療安全全国共同行動による VTE 予防の取り組み. VTE 最前線 6: 10-11, 2012
 - ・小林隆夫：日本における静脈血栓塞栓症予防の現状. 月刊ナーシング 32(8): 109-111, 2012
 - ・小林隆夫：静脈血栓塞栓症予防—院内での取り組みと安全対策の重要性について. 月刊ナーシング 32(8): 114-116, 2012
 - ・小林隆夫：婦人科がん治療における血栓症対策. 日本臨床 70 増刊号 4: 756-762, 2012
 - ・小林隆夫：産婦人科領域における予防対策. Thrombosis Medicine 2(2): 140-144, 2012
 - ・小林隆夫：妊娠と抗凝固療法. 後藤信哉編集, 新しい経口抗凝固薬、どう使う? 日本医事新報社, 東京, 156-158, 2012
 - ・小林隆夫：静脈血栓塞栓症. 日本周産期・新生児医学会教育・研修委員会編集, 症例から学ぶ周産期診療ワークブック. メディカルビュー社, 東京, pp50-53, 2012
 - ・小林隆夫：肺血栓塞栓症の予防と治療指針. 岡元和文編著, 救急・集中治療ガイドライン—最新ガイドライン—2012-'13, 総合医学社, 東京, pp267-271, 2012
 - ・Ando M, Fukuda I, Ito M, Kobayashi T, Masuda M, Miyahara Y, Nakanishi N, Niwa K, Ohgi S, Tajima H; JCS Joint Working Group. Guidelines for the diagnosis, treatment and prevention of pulmonary thromboembolism and deep vein thrombosis (JCS 2009) - digest version-. Circ J 75(5): 1258-1281, 2011
 - ・小林隆夫：静脈血栓塞栓症の予防・治療ガイドラインについて. 日本血栓止血学会編集, わかりやすい血栓と止血の臨床. 南江堂, 東京, pp126-131, 2011
 - ・小林隆夫：妊婦と呼吸器病. 永井良三総監修, 呼吸器研修ノート. 診断と治療社, 東京, pp346-350, 2011
 - ・小林隆夫：深部静脈血栓症. 斎藤英彦編, 抗血栓薬の最前線. 医薬ジャーナル社, 大阪, pp242-261, 2011

- ・ 小林隆夫： 静脈血栓塞栓症. 産婦人科の薬剤使用プラクティス：病態別処方産科編. 産婦人科の実際 60(11) 臨時増刊号：1793-1799, 2011
 - ・ 小林隆夫： 静脈血栓塞栓症の予防. 日本医師会雑誌 139(10)：2111-2116, 2011
 - ・ 小林隆夫： 特集＝静脈血栓塞栓症の診断・治療・予防. －予防－. MEDICAMENT NEWS 第2053号(2011年6月5日号)：9-11, 2011
 - ・ 小林隆夫： 静脈血栓塞栓症 (VTE) の現状と予防対策. 産婦人科治療 103(6)：655-658, 2011
 - ・ 小林隆夫： 静脈血栓塞栓症の予防. 臨床検査 55(4)：367-372, 2011
 - ・ 小林隆夫： 安全管理から見た深部静脈血栓症 (DVT) の予防と治療. 産婦人科における DVT 予防対策とその効果. Vascular Lab 8(4)：24-29, 2011
 - ・ 小林隆夫： 産科における血栓症. Fetal & Neonatal Medicine 3(3)：120-123, 2011
 - ・ 小林隆夫： 深部静脈血栓症を予防するにはどうしたらいいの？全科に必要な重症患者ケア Q&A 第2版. ナーシングケア Q&A 40号：256-257, 2011
 - ・ 波多江正紀, 前田隆嗣, 上塘正人, 中村俊昭, 鶴田雅史, 浦田正和, 松本純, 古城卓真, 中川浩, 片野田康之, 小林隆夫： 硬膜外麻酔に関わる硬膜外血腫とヘパリンカルシウム (カプロシン®) 投与の時間的関連についての検討. 日産婦新生児血会誌 20(2)：7-12, 2011
 - ・ 富士武史, 小林隆夫, 左近賢人： 予防 (Overview：総論的に). VTE ジャーナル 1(2)：4-15, 2011
 - ・ 小林隆夫： 血栓性静脈炎. 母体感染症 up to date. 周産期医学 41(2)：261-265, 2011
 - ・ 小林隆夫： 産婦人科における静脈血栓塞栓症の現状. 臨床婦人科産科 65(2)：98-103, 2011
 - ・ 小林隆夫： 周産期医学必修知識第7版. 産科編 111 深部静脈血栓症. 周産期医学 41 増刊号：328-331, 2011
 - ・ 小林隆夫： 周産期医学必修知識第7版. 産科編 112 肺血栓塞栓症. 周産期医学 41 増刊号：332-335, 2011
 - ・ 小林隆夫： 深部静脈血栓症/肺血栓塞栓症. ER・ICUでの薬の使い方 Q&A—プロの実践と秘訣に学ぶ—. 救急・集中治療 23(1, 2)：221-226, 2011
 - ・ 小林隆夫： 肺血栓塞栓症. 川鱈市郎編著, 産科急変のシグナルとベスト対応. ペリネイタルケア 2011 年新春増刊. メディカ出版, 大阪, pp158-165, 2011
 - ・ 小林隆夫： 妊産婦死亡予防に向けて—まず行うべきこと—. 肺血栓塞栓症. 産婦人科の実際 60(1)：39-47, 2011
 - ・ 小林隆夫： 周産期における肺血栓塞栓症対策. 静岡県母性衛生学会学術雑誌 1(1)：3-10, 2011
 - ・ 小林隆夫： フォンダパリヌクスによる静脈血栓塞栓症の予防：産婦人科領域. 血液フロンティア 21(4)：577-584, 2011
- ## 2. 学会発表
- ・ Kobayashi T, Hirai K, Kasamatsu K, Kobayashi M, Iwase T, Kanai T, Matsuoka T, Sugiyama K, Tsuda T. Normalized activated protein C sensitivity ratio and protein S-specific activity are useful

predictive markers for venous thromboembolism. XXIVth Congress of the International Society on Thrombosis and Haemostasis, Amsterdam, 2013. 6. 29-7. 4

・Kobayashi T: Incidence and prevention of VTE: Are they quality indicators in hospital setting? Asia Venous Thrombosis Forum. Seoul, 2012. 12. 1

・Kobayashi T: Japan overall scheme of DVT prevention & reimbursement system. Asia Venous Thrombosis Forum. Seoul, 2012. 12. 1

・小林隆夫: 静脈血栓塞栓症の予知と早期診断. 第 13 回肺塞栓症研究会教育セッション. 東京, 2012. 11. 24

・平井久也, 小林隆夫: 浜松医療センターにおける肺塞栓症予知に関する研究. 第 30 回周産期医療研究会, 静岡, 2012. 11. 3

・小林隆夫: ヘパリン在宅自己注射療法の適応と導入方法. 医療安全からみた VTE の診断と治療. 第 53 回日本脈管学会総会, 東京, 2012. 10. 11

・Tsuda H, Kobayashi T, Tsuda T. Total protein S assay system: Clinical significance and pre-analytical quality control. 58th Annual Meeting of the Scientific and Standardization Committee of the ISTH, Liverpool, 2012. 6. 28

・小林隆夫: プロテイン S 比活性と肺塞栓症. 第 34 回日本血栓止血学会ランチョンセミナー. 東京, 2012. 6. 9

・平井久也, 杉山和子, 岩瀬敏樹, 金井俊和, 小林正和, 岩本竜明, 斎藤辰男,

金山尚裕, 小林隆夫: 活性化プロテイン C 感受性比およびプロテイン S 比活性を用いた静脈血栓塞栓症予知に関する研究. 第 34 回日本血栓止血学会. 東京, 2012. 6. 8

・左近賢人, 前原嘉彦, 小林隆夫, 小林浩, 島居徹, 瀬尾憲正, 小関靖: DPC データベースを用いた症候性静脈血栓塞栓症の疫学的検討. 第 34 回日本血栓止血学会学術集会, 東京, 2012. 6. 8

・小林隆夫: 産科領域および外科手術に伴う静脈血栓塞栓症. 第 6 回日本血栓止血学会 SSC シンポジウム血栓性素因部会「血栓性素因とプロテイン S 活性測定」. 東京, 2012. 1. 21

・Sakon M, Maehara Y, Kobayashi T, Seo N, Kobayashi H, Shimazui T, Ozeki Y. Evaluation of the risk factors of venous thromboembolism in Japanese surgical and non-surgical patients using an electronic patient database. XXIIIth Congress of the International Society on Thrombosis and Haemostasis, Kyoto, 2011. 7. 24-28

・Tsuda T, Jin X, Tsuda H, Morishita E, Kobayashi T, Hamasaki N. Evaluation of novel total protein S assay system for screening of protein S type II deficiency. XXIIIth Congress of the International Society on Thrombosis and Haemostasis, Kyoto, 2011. 7. 24-28

・Tsuda H, Morishita E, Kobayashi T, Tsuda T, Jin X. A clinical application of the screening system for protein S type II deficiency. The 21st International Congress of Clinical

Chemistry and Laboratory Medicine, Berlin, 2011.5.15-19

・高木佑芙紀, 岩本竜明, 及川文雄, 笠松紀雄, 小林隆夫, 成瀬智, 秋永泰嗣, 小澤享史, 岩瀬敏樹, 岡田喜親, 佐々木俊哉, 内藤健助, 金井俊和, 小林正和, 遠藤祐子, 山口幸子, 平松みどり, 横井典子, 中村直樹: 当院における静脈血栓塞栓症予防の組織的な取り組み. 日本麻酔科学会第 58 回学術集会, 神戸, 2011.05.19

(以降、講演)

- ・小林隆夫: 女性ホルモン剤と肺塞栓症. 鳥取産婦人科研修会. 米子, 2013.12.19
- ・小林隆夫: 静脈血栓塞栓症の予防～リスク評価と予防対策～. 名古屋医療センター静脈血栓塞栓症予防セミナー. 名古屋, 2013.12.5
- ・小林隆夫: 静脈血栓塞栓症の予防～リスク評価と予防対策～. 和歌山ろうさい病院静脈血栓塞栓症予防教育セミナー. 和歌山, 2013.11.15
- ・小林隆夫: 女性ホルモン剤と肺塞栓症. 埼玉県産婦人科医会東部ブロック勉強会. 越谷, 2013.11.13
- ・小林隆夫: 女性ホルモン剤と肺塞栓症. 第 6 回大和市産婦人科医会研究会. 大和, 2013.11.12
- ・小林隆夫: 静脈血栓塞栓症の予防～リスク評価と予防対策～. 長野赤十字病院医療安全講習会. 長野, 2013.11.5
- ・小林隆夫: 肺塞栓症予防と医療訴訟. 徳島県立中央病院院内セミナー. 徳島, 2013.10.11
- ・小林隆夫: 妊産婦における静脈血栓塞栓症の予防対策～ヘパリン在宅自己注射

の役割～. 第 34 回日本妊娠高血圧学会ランチョンセミナー. 富山, 2013.10.5

- ・小林隆夫: 女性ホルモン剤と血栓症. 薬の安全処方を考える会. 仙台, 2013.9.27
- ・小林隆夫: 女性ホルモン剤と肺塞栓症. 一宮産婦人科医会講演会. 一宮, 2013.9.21
- ・小林隆夫: 女性ホルモン剤と肺塞栓症. 拡大一土会特別講演. 静岡, 2013.9.4
- ・小林隆夫: 女性ホルモン剤と肺塞栓症. 宮崎市郡産婦人科医会学術講演会. 宮崎, 2013.8.26
- ・小林隆夫: 女性ホルモン剤と肺塞栓症. 千葉市地区産婦人科医会講演会. 千葉, 2013.8.22
- ・小林隆夫: 女性ホルモン剤と血栓症. 薬の安全処方を考える会. 広島, 2013.8.10
- ・小林隆夫: 女性ホルモン剤と肺塞栓症. 町田市産婦人科医会学術講演会. 町田, 2013.8.8
- ・小林隆夫: 女性ホルモン剤と肺塞栓症. 月経困難症学術講演会. 大阪, 2013.8.3
- ・小林隆夫: 女性ホルモン剤と肺塞栓症. 中信産婦人科医会学術講演会. 松本, 2013.8.2
- ・小林隆夫: 女性ホルモン剤と肺塞栓症. 沖縄県産婦人科学術講演会. 那覇, 2013.7.26
- ・小林隆夫: 女性ホルモン剤と肺塞栓症. 練馬区産婦人科医会研修会. 東京, 2013.7.20
- ・小林隆夫: 産婦人科における肺血栓塞栓症/深部静脈血栓症 (静脈血栓塞栓症) の現状と予防対策. 第 10 回肺血栓塞栓

- 症研究会. 宇都宮, 2013. 7. 19
- ・小林隆夫: 女性ホルモン剤と肺塞栓症. 第 214 回大分市医師会産婦人科臨床検討会特別講演. 大分, 2013. 7. 12
 - ・小林隆夫: 女性ホルモン剤と肺塞栓症. 熊谷市産婦人科医会学術講演会特別講演. 熊谷, 2013. 7. 11
 - ・小林隆夫: 肺塞栓症予防対策と肺塞栓症予知は可能か. 平成 25 年度第 2 回血液研究班研修会. 静岡, 2013. 7. 6
 - ・小林隆夫: 月経困難症治療におけるルナベル配合錠の安全処方とは? ~ 血栓症リスクを回避するコツ ~. Web カンファレンス. 浜松, 2013. 6. 20
 - ・小林隆夫: 女性ホルモン剤と血栓症. 薬の安全処方を考える会. 名古屋, 2013. 6. 14
 - ・小林隆夫: 女性ホルモン剤と肺塞栓症. 第 135 回東北連合産科婦人科学会学術講演会特別講演. 山形, 2013. 6. 9
 - ・小林隆夫: 手術後の静脈血栓塞栓症 (肺血栓塞栓症/深部静脈血栓症) の現状と予防. いばらき VTE シンポジウム. 笠間, 2013. 5. 17
 - ・小林隆夫: 重症妊娠悪阻に対する肺塞栓症とウェルニッケ脳症の予防. 第 65 回日本産科婦人科学会学術講演会生涯研修プログラム. 札幌, 2013. 5. 12
 - ・小林隆夫: 産科領域における肺塞栓症予防と医療訴訟. 第 65 回日本産科婦人科学会モーニングセミナー. 札幌, 2013. 5. 11
 - ・小林隆夫: 女性ホルモン剤と肺塞栓症. 日産婦日産医群馬県支部集談会. 前橋, 2013. 4. 13
 - ・小林隆夫: 女性ホルモン剤と血栓症. 薬の安全処方を考える会. 東京, 2013. 4. 12
 - ・小林隆夫: 女性ホルモン剤と肺塞栓症. 神奈川県 Basic Science Seminar. 横浜, 2013. 3. 23
 - ・小林隆夫: 肺血栓塞栓症の予防 ~ リスク評価と予防対策 ~. 関西医科大学附属枚方病院静脈血栓塞栓症予防セミナー. 枚方, 2013. 3. 22
 - ・小林隆夫: わが国の肺塞栓症の現状と院内における予防対策. 市立函館病院医療安全講演会. 函館, 2013. 3. 15
 - ・小林隆夫: 院内における肺塞栓症予防対策と肺塞栓症予知の試み. 第 10 回近畿臨床血栓性疾患研究会. 堺, 2013. 2. 16
 - ・小林隆夫: 女性ホルモン剤と肺塞栓症. 東京産婦人科医会多摩ブロック会学術講演会. 立川, 2013. 1. 31
 - ・小林隆夫: そこが知りたい 肺血栓塞栓症予防のスタンダード. COVIDIEN 第 4 回 VTE セミナー「肺血栓塞栓症~院内における安全対策と医療紛争」. 福岡, 2013. 1. 20
 - ・小林隆夫: 静脈血栓塞栓症の予防 ~ リスク評価と予防対策 ~. 東京警察病院静脈血栓塞栓症予防セミナー. 東京, 2012. 11. 22
 - ・小林隆夫: 浜松医療センターにおける肺塞栓症予防対策と肺塞栓症予知に関する研究. 平成 24 年度浜松市衛生検査所精度管理責任者等研修会特別講演, 浜松, 2012. 11. 8
 - ・小林隆夫: 女性ホルモン剤と肺塞栓症 - 発症メカニズムの謎に迫る -. 第 2 回 Basic Science Seminar of Women's

Health Care. 名古屋, 2012.11.1

・小林隆夫: 女性ホルモン剤と肺塞栓症－発症メカニズムの謎に迫る－. 第 90 回北海道産科婦人科学会学術講演会ランチョンセミナー. 札幌, 2012.10.28

・小林隆夫: 女性ホルモン剤と肺塞栓症－発症メカニズムの謎に迫る－. 第 2 回 Basic Science Seminar of Women's Health Care. 大阪, 2012.10.20

・小林隆夫: 静脈血栓塞栓症の予防～リスク評価と予防対策～. 広島赤十字・原爆病院静脈血栓塞栓症予防セミナー. 広島, 2012.10.19

・小林隆夫: 女性ホルモン剤と肺塞栓症－発症メカニズムの謎に迫る－. 第 2 回 Basic Science Seminar of Women's Health Care. 東京, 2012.10.13

・小林隆夫: わが国における肺塞栓症予防対策の現状と当院での取り組み. 浜松医療センター医療安全研修会. 浜松, 2012.9.27

・小林隆夫: 女性ホルモン剤と肺塞栓症－血栓症の発症メカニズムの謎に迫る－. 平成 24 年第 3 回福岡県産婦人科医会福岡ブロック会学術講演会特別講演. 福岡, 2012.9.11

・小林隆夫: わが国の静脈血栓塞栓症の現状と予防対策. 平成 24 年度日本医師会生涯教育講座. 甲府, 2012.9.9

・小林隆夫: 静脈血栓塞栓症の予防～リスク評価と予防対策～. 東京慈恵会医科大学附属第三病院静脈血栓塞栓症予防セミナー. 東京, 2012.7.20

・小林隆夫: 静脈血栓塞栓症の予防～院内での取り組みと安全対策の重要性について～. COVIDEIN 第 3 回 VTE 医療安全

セミナー「肺血栓塞栓症～院内における安全対策と医療紛争」. 札幌, 2012.7.14

・小林隆夫: 女性ホルモン剤と肺塞栓症－血栓症の発症メカニズムの謎に迫る－. 佐賀産婦第 204 回学術研修会特別講演. 佐賀, 2012.7.7

・小林隆夫: 浜松医療センターの肺塞栓症に対する取り組み－活性化プロテイン C 感受性比とプロテイン S を用いた肺塞栓症予知について－. 第 11 回三重県生涯教育特別研修セミナー, 津, 2012.6.22

・小林隆夫: 院内における肺塞栓症対策. 東京都立多摩総合医療センター医療安全対策推進研修会. 東京, 2012.6.8

・小林隆夫: 静脈血栓塞栓症の予防～院内での取り組みと安全対策の重要性について～. COVIDEIN 第 2 回 VTE 医療安全セミナー「肺血栓塞栓症～院内における安全対策と医療紛争」. 大阪, 2012.6.2

・小林隆夫: 術後の静脈血栓塞栓症 (VTE) 予防. 産婦人科 m3 Web 講演, 2012.5.14

・小林隆夫: 静脈血栓塞栓症の予防～リスク評価と予防対策～. 医療法人大雄会総合大雄会病院静脈血栓塞栓症予防セミナー. 一宮, 2012.5.9

・小林隆夫: 女性ホルモン剤と肺塞栓症. 第 64 回日本産科婦人科学会学術講演会ランチョンセミナー. 神戸, 2012.4.14

・小林隆夫: 日本における静脈血栓塞栓症予防の現状. COVIDEIN 第 1 回 VTE 医療安全セミナー「肺血栓塞栓症～院内における安全対策と医療紛争」. 東京, 2012.3.3

・小林隆夫: 静脈血栓塞栓症の予防～院内での取り組みと安全対策の重要性について～. COVIDEIN 第 1 回 VTE 医療安全

- セミナー「肺血栓塞栓症～院内における安全対策と医療紛争」。東京，2012. 3. 3
- ・小林隆夫：静脈血栓塞栓症の予防ー内科領域における静脈血栓塞栓症のリスク評価と予防対策。第16回静岡県血液・免疫疾患治療研究会特別講演。浜松，2012. 2. 18
 - ・小林隆夫：産婦人科における肺血栓塞栓症対策。広島県産婦人科医会研修会。広島，2012. 2. 5
 - ・小林隆夫：静脈血栓塞栓症の予防、診断治療への取組み。総合病院国保旭中央病院リスクマネジメント講演会。旭市，2012. 2. 3
 - ・小林隆夫：妊産婦における静脈血栓塞栓症の予防と治療。第6回日本血栓止血学会 SSC シンポジウム静脈血栓症/肺塞栓症部会基調講演。東京，2012. 1. 21
 - ・小林隆夫：静脈血栓塞栓症実践の院内対策。墨田静脈血栓塞栓症対策セミナー。東京，2012. 1. 13
 - ・小林隆夫：院内における静脈血栓症の予防～リスク評価と予防対策。高知医療センター静脈血栓塞栓症講演会。高知，2011. 12. 7
 - ・小林隆夫：静脈血栓塞栓症の予防～浜松医療センターでの取組みを中心に～。第46回中部歯科麻酔研究会特別講演。浜松，2011. 12. 4
 - ・小林隆夫：静脈血栓塞栓症の臨床と検査～浜松医療センターでの取組みと予知の話を交えて～。凝固線溶、基礎と臨床 UPDATE (コアプレスタ発売5周年記念セミナー) 特別講演。浜松，2011. 12. 3
 - ・小林隆夫：肺塞栓症 (いわゆるエコノミークラス症候群) を予防する。第3回舞鶴市民医療フォーラム～知って得する健康講座～。舞鶴。2011. 10. 29
 - ・小林隆夫：悪性腫瘍の患者に発生する静脈血栓塞栓症の予防と対策。静岡県立静岡がんセンター医療安全研修会。長泉。2011. 10. 13
 - ・小林隆夫：院内における医療安全 ～院内における静脈血栓塞栓症予防マニュアル作成を中心に～。第65回国立病院総合医学会ランチョンセミナー。岡山，2011. 10. 08
 - ・小林隆夫：周術期肺塞栓症予防について。山形県立中央病院医療安全管理全体研修会。山形，2011. 09. 22
 - ・小林隆夫：周産期における肺血栓塞栓症対策。静岡県母性衛生学会ランチョンセミナー。静岡，2011. 09. 04
 - ・小林隆夫：周術期における静脈血栓塞栓症とその対策～管理の必要性和予防・治療のコツ。北海道産婦人科周術期合併症研究会～。札幌，2011. 08. 20
 - ・小林隆夫：静脈血栓塞栓症の予防～リスク評価と予防対策～。山梨県立中央病院静脈血栓塞栓症予防教育セミナー，甲府，2011. 8. 05
 - ・小林隆夫：世界の VTE 予防キャンペーンと international VTE Prevention Policy Forum の紹介。肺塞栓症予防国際フォーラム in Kyoto, 肺塞栓症予防セミナー イブニングセミナー，京都，2011. 07. 23
 - ・小林隆夫：静脈血栓塞栓症の予防～リスク評価と予防対策～。大阪市立大学静脈血栓塞栓症予防教育セミナー，大阪，2011. 7. 08
 - ・小林隆夫：チーム医療で推進する院内

肺塞栓症予防対策. 名古屋市立大学医療
事故防止講演会, 名古屋, 2011. 6. 24

・小林隆夫: 静脈血栓塞栓症の予防 ～
リスク評価と予防対策～. 大阪医療セン
ター医療安全研修会, 大阪, 2011. 6. 17

・小林隆夫: 周術期静脈血栓塞栓症予防
のアップデート～浜松医療センターにお
ける予防対策～. 第 16 回東海肺塞栓症研
究会, 名古屋, 2011. 6. 3

・小林隆夫: 当院における肺塞栓症予防
対策の取組み. 浜松医療センター医療安
全研修会, 浜松, 2011. 6. 2

・小林隆夫: 周産期における静脈血栓塞
栓症とその対策～管理の必要性と予防・
治療のコツ～. 第 303 回二水会特別講演,
広島, 2011. 5. 11

H. 知的所有権の出願・取得状況

1. 特許取得

なし

2. 実用新案登録

なし

3. その他

なし

研究成果の刊行に関する一覧表

<書籍>

著者氏名	論文タイトル名	書籍全体の編集者名	書籍名	出版社名	出版地	出版年	ページ
安藤裕美、 小嶋哲人	新規抗凝固薬 (抗Xa、抗トロンビン約)のポテンシャル	編:直江知樹、小澤敬也、中尾眞二編	血液疾患 最新の治療 2014-2016	南江堂	東京	2014	54-58
<u>Tomiyama Y</u>	Thrombopoietin receptor agonists.	Salama A	Current & Emerging Treatments for Immune Thrombocytopenia.	Future Medicine	UK	2013	88-106
富山佳昭	特発性血小板減少性紫斑病.	山口徹, 北原光夫, 福井次矢	今日の治療指針 2013年版	医学書院	東京	2013	621-623
藤村欣吾	ループスアンチコアグラント (LA)	Medical Practice 編集委員会 (和田攻、大久保昭行、矢崎義雄、大内尉義)	臨床検査ガイド 2013~2014	文光堂	東京	2013	651-653
藤村欣吾	出血性疾患	北村 聖	臨床病態学 1	ヌーヴェルヒロカワ	東京	2013	613-627
高木 明、 小嶋哲人	凝固因子	編:朝倉英策	臨床に直結する血栓止血学	中外医学社	東京	2013	67-69
小嶋哲人	凝固障害、線溶障害	編:小川聡	改訂第8版 内科学書 Vol.6 血液・造血器疾患、神経疾患	中山書店	東京	2013	187-192
小林隆夫	II. 各論 1. 産婦人科 A 産科	瀬尾憲正, 古家仁	周術期深部静脈血栓/肺血栓塞栓症	克誠堂出版	東京	2013	101-119
榛沢和彦	災害医療と肺血栓塞栓症	永井厚志 巽 浩一郎	Annual Review 呼吸器	中外医学社	東京	2013	146-152

富山佳昭	トロンボポエチン受容体作動薬の安全性と副作用をみる－副作用の頻度とその対策－.	池田康夫	トロンボポエチン受容体作動薬のすべて	先端医学社	東京	2012	62-74
富山佳昭	ITPにおけるTPO受容体作動薬の使い方.	高久史麿, 小澤敬也, 坂田洋一, 金倉 讓, 小島勢二	ITPにおけるTPO受容体作動薬の使い方.	中外医学社	東京	2012	198-206
藤村欣吾	ITP治療におけるトロンボポエチン受容体作動薬に期待される役割(臨床的意義)を教えてください	池田康夫	トロンボポエチン受容体作動薬のすべて	先端医学社	東京	2012	111
藤村欣吾	血液・造血器の疾患	日本薬学会編	スタンダード薬学シリーズ6 薬と疾病 II. 薬物治療(1) 第2版	東京化学同人	東京	2012	93-126
藤村欣吾	多発性骨髄腫	放射線被爆者医療国際協力推進協議会	原爆放射線の人体影響	文光堂	東京	2012	170-179
藤村欣吾	特発性血小板減少性紫斑病(2) 成人	正岡徹	静注用免疫グロブリン製剤ハンドブック	メディカルレビュー社	大阪	2012	79-90
藤村欣吾	特発性血小板減少性紫斑病(ITP)治療におけるトロンボポエチン受容体作動薬の位置付けを探る	池田康夫	トロンボポエチン受容体作動薬のすべて	先端医学社	東京	2012	76-86

川崎富夫	未熟児網膜症姫路日赤事件最高裁判決と医療現場感覚との落差—司法と医療の認識統合を求めて	甲斐克則	医事法講座第3巻 医療事故と医事法	信山社	東京	2012	3-27
川崎富夫	肝硬変の治療にあたり、生体肝移植について説明すべき義務の違反があるとされた事例	日本医事法学会	年報医事法学	日本評論社	東京	2012	143-148
川崎富夫	混合診療	日本医事法学会	年報医事法学	日本評論社	東京	2012	208-213
榛沢和彦	災害時に起こりやすい循環器疾患-肺血栓塞栓症・深部静脈血栓症	心臓病学会	循環器内科医のための災害時医療ハンドブック	日本医事新報社	東京	2012	88-93.
涌井昌俊、村田 満	線溶系分子マーカー（フィブリン/フィブリノゲン分解産物（FDP）、プラスミン $\alpha 2$ -プラスミンインヒター複合体（PIC））		日本臨床検査ガイド 2011~2012	文光堂	東京	2011	625-360
藤村欣吾	ループスアンチコアグラント（LA）	Medical Practice 編集委員会	臨床検査ガイド 2011~2012	文光堂	東京	2011	637-639
杉原清香、藤村欣吾	紫斑病	横田千津子、池田宇一、大越教夫	病気と薬パーフェクト BOOK 2011	南山堂	東京	2011	786-790
杉原清香、藤村欣吾	出血傾向	横田千津子、池田宇一、大越教夫	病気と薬パーフェクト BOOK 2011	南山堂	東京	2011	158-159

藤村欣吾	特発性血小板減少性紫斑病②成人	正岡 徹	静注用免疫グロブリン製剤ハンドブック	メディカルレビュー社	大阪	2011	79-90
藤村欣吾	止血・凝固系の異常：特発性血小板減少性紫斑病	岡庭 豊、 荒瀬康司、 三角和雄	year note ATLAS 4th edition	MEDICMED IA	東京	2011	32
鈴木伸明、 小嶋哲人	先天性血栓性素因	小松則夫/ 片山直之/ 富山佳昭	専門医のための薬物療法 Q&A:血液	中外医学社	東京	2011	379-387
小嶋哲人	先天性凝固阻止因子欠乏症 (antithrombin, protein C, protein S 欠損症)	日本血栓止血学会 編集	わかりやすい血栓と止血の臨床	南江堂	東京	2011	107-109
中山享之、 小嶋哲人	ワルファリンの薬効評価 V 抗血栓療法薬の薬効評価は？	後藤信哉 編	-そこが知りたい 抗血栓療法-	メジカルビュー社	東京	2011	122-128

< 雑誌 >

著者名	論文タイトル名	発表誌名	巻号	ページ	出版年
Murata M, Takagi A, Suzuki A, Okuyama E, Takagi Y, Ando Y, Kato I, Nakamura Y, Murate T, Matsushita T, Saito H, <u>Kojima T</u>	Development of a new laboratory test to evaluate antithrombin resistance in plasma.	Thromb Res	133 (2)	293-298	2014
Nakamura M, Miyata T, Ozeki Y, Takayama M, Komori K, Yamada N, Origasa H, Satokawa H, Maeda H, Tanabe N, Unno N, Shibuya T, Tanemoto K, Kondo K, <u>Kojima T</u>	Current venous thromboembolism management and its outcomes in Japan: the nationwide JAVA observational study.	Circ J		in press	2014
Sakata A. Ohmori T. Nishimura S. Suzuki H. Madoiwa S. Mimuro J. Kario, K. <u>Sakata Y.</u>	Paxillin is an intrinsic negative regulator of platelet activation in mice.	Thromb J		Epub ahead of print	2014
Koyama K. Madoiwa S. Nunomiya S. Koinuma T., Wada, M. Sakata, A. Ohmori T. Mimuro J. <u>Sakata Y.</u>	Combination of thrombin-antithrombin complex, plasminogen activator inhibitor-1, and protein C activity for early identification of severe coagulopathy in initial phase of sepsis: a prospective observational study.	Criti care		Epub ahead of print	2014
<u>高蓋寿朗</u>	特発性血小板減少性紫斑病 -病態と診断のすすめかた-	Medical Practice	31	53-57	2014
Asano J. Ueda R. Tanaka Y. Shinzato I. <u>Takafuta T.</u>	Effects of Immunosuppressive Therapy in a Patient with Aplastic Anemia-Paroxysmal Nocturnal Hemoglobinuria (AA-PNH) Syndrome during Ongoing Eculizumab Treatment.	Internal Med	53	125-128	2014